

平成3年2月12日第三種郵便物認可
平成9年3月1日発行(毎月1回1日発行)
第8巻・第3号(通巻第78号)

藍生

97-3
AOI

藍生俳句会



'97 藍生新年会

'97藍生新年会は1月12日、例会の終了後に東京・池袋の東京芸術劇場で約80人が参加して開かれました。会員のあいさつ、そしてドイツのケルン大学から慶応大学とドイツ文化センターでドイツ語を教えに来日中のヴィットカンプ・ロバートさんが特別参加して大いに盛り上がりました。



黒田主宰あいさつ。右は乾杯の首領をした村田英尾さん。左のロバートさんは、種田山頭火の作品の解釈と鑑賞をドイツ語で出版。博士論文執筆のため江戸後期の国学者で、紀行作家の菅江真澄について研究中

撮影・横井定利



司会の水巻令子さん
(左)と神保洋子さん

平成3年2月12日第三種郵便物認可
平成9年4月1日発行(毎月1回1日発行)
第8巻・第4号(通巻第79号)

藍生

97-4
AOI

藍生俳句会

第76回 藍生句会（平成九年一月十二日）

今日は、いつもより出句の数が多かったのですが、必ずしもよい句が多かったとはいえません。

特選句の短評をいたします。

捨て芋の年を越したる青芽かな 佐藤 憲夫

畑のこともしておられる佐藤さんの句ですから、台所ではなく畑に捨てておいたお芋でしょう。それにもう青芽が出ている。自分も越年したが、お芋も年を越したのだなあということ。写實的に詠まれています。ある境涯にも関わってくる面白い句です。

雪を聴く巧みな嘘と思ひつつ 森 てふ子

かすかな雪の音を聴いている。ここで、いったん切れます。耳を傾けていると、以前何かあったこと、あるいはいまの話、みんな嘘だったのだと思われるということですね。全体の構成としてバランスもよいし、いやみのない巧みな句だと思います。

龍の玉深井に人をうしなうて 山口都茂女

初めに龍の玉という季語を置き、中七と下五でドラマティックなことが詠まれています。この井戸に身をなげて亡くなった人がいるという。その言葉ですが、死んだといわずに、うしなうた、といって残された人の立場から詠まれています。そこるところ

を、よく味わってください。

たれも来なかつた玄関の福寿草 栗島 弘

互選で最高点だった作品。お正月の花として玄関に置いてある福寿草。「玄関の」がきいています。

「たれも来なかつた家の福寿草」といったのでは散文文なのです。この句は「玄関の」ということで句になっている。物に託して深いことを詠んでいます。

この国にもう三回目初日さす

ヴァイツトカンプ・ロバート

ロバートさんは三十七歳。ケルン大学の日本文学科で、芭蕉や蕪村、一茶をまず勉強されました。それが約十年前のこと。この句もレトリックの上からいえば、いろいろ直すことはできます。ですが、皆さんもこの句を書きとって初心にもどり、ロバートさんの心を受けとっていただきたいと思っています。

かぎ裂のごとし冬三日月尖る 久慈 貴考

冬三日月の出ている空、それを美しいなどといわず、かぎ裂きのようにだと見てとったわけです。一種の比喩ですね。この句は、全部言いつくしているところが、若々しく、逆によいといえます。

膝笑ひはじめし独楽のたふれけり 安田 鈴彦
面白い句です。廻っている独楽がたおれてゆく、

ついでてゆく。その状況をうまくとらえています。

耳吹かかなたかすかに冬の虹 小池 啓子

皆さんが、あまり気づかれなかった句。地味な句
また歌でいえば、低い細い声でうたっていると、ど
うしても聞き洩らしがちですが、この句はいいと思
いました。自分の耳が吹かれているかなた、目を凝
らせば、冬の虹がくすかにあることよ、ということ
です。冷たくはりつめた透明な空気のなかに立って
いる作者に共感いたしました。

冬峰やたたまれてゆく旗の上 大隅 優子

お正月とか祝日の旗でしようか、たたまれてゆく
その旗の上に冬の蜂がいる。布の上の蜂、それも旗
という、ある質感の感じられるもの、その上にす
がっている蜂なのです。大隅さん上達しました。

七草の籠にも伏してほとけのざ 稲葉 春枝
ほとけのざというのは、平たく広がる植物。その

主宰作品

日脚のぶ雑木林にひとのころゑ
あけぼのや崩るゝ音を寒牡丹
道掃かれあり寒の星寒の星

様子や伏していると感じた。この草は地にも伏して
いるが、摘みとって七草の籠に盛られているほとけ
のざも伏していることだと。七草の中の、ほとけの
ざに焦点を当てて感動したのですね。立派な句です。

面の奥より狐火を見てをりぬ 水巻 津花

狐火というものが幻想的なロマンティックな
もの。人間の心のなかにみえる火のようなものです。
人が面をつけてもう一枚の顔をつくった。その奥か
ら狐火をみているという、この句に感心しました。

耳鳴のおこりてやみぬ水仙花 山口 恭徳

耳鳴りがしてきたと思うと、いつのまにかふつと
やんでいる。そして水仙のある部屋、または野に作
者がいるということなのです。まぎれもない自分
自身の肉体の实在を詠んでいるのです。耳鳴りと水
仙花との衝撃もいし、洗ひ魅力のある句。

降る雪や二階へあがる父の音 大隅 優子

お正月に帰省して、ご両親のもとですごしてい
る。そのとき、たまたま雪が降ってきた。そんな静
かなとき、二階へ上がってゆく人の音がする。あれ
は母ではなく父の音である、と聞きとったという娘
の句ですね。いい句、優しい子の句。

(今西美佐子記)